

## 【滋賀】「患者さんの生活を豊かに」離島の住民に気付かされた医師としての目的-徳田嘉仁・一般社団法人くわくわ企画代表に聞く◆Vol.2

2023年6月2日（金）配信 m3.com地域版

「おいしい、楽しい、居心地がいい」。診療所をそんなポジティブな気持ちで人が集まる場所にしたいと、2020年から父が営む「徳田医院」（彦根市）のリニューアルを検討している徳田嘉仁氏。構想の根っこにある「患者さんの生活を豊かにしたい」という医師としての目的を再確認できたのは、「離島のおじい、おばあのおかげ」という。徳田氏が研修医時代に直面した印象的な出来事とは。（2023年5月2日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



徳田嘉仁氏（本人提供）

——くわくわ企画の[サイト](#)によると、徳田先生は徳田医院のリニューアルに当たり、社会的な課題を踏まえてコンセプトや取り組みを考えてきたといいます。徳田先生が思う「社会的な課題」とは。

診療所リニューアルの主なテーマは三つあります。「生について真剣に考える遊び場をつくる」「（診療所以外の）余白のデザインをたくさんつくる」「（医療受診や医師对患者といった）目的と関係性の固定化を外す」——です。

こうしたテーマを掲げた背景は、私の研修医時代の経験にさかのぼります。私は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修を受けていたころ、「医師であれば、目の前で人が死にそうなき最低限その人の命を救えるようになりたい」と救急医を志しました。2年間の初期研修後、もっと救急医療を学びたいと同センターに1年間、救急医として残らせてもらいました。

私はこの時期、患者さんやご家族から印象的なことを聞きました。救命救急を行っていた沖縄県の宮古島では医療資源が限られるため、ドクターヘリで患者さんを本島に搬送することがありました。高齢の患者さんは「ヘリかね」と尋ね、私は「ヘリだよ」「ヘリじゃないと助からんさ」などと答えていました。

しかし、あまりにもよく同じことを聞かれます。疑問に思っていたところ、指導医が教えてくれました。島民には、ヘリに乗って本島に行くと同センターには戻ってこれない印象があると。実際、搬送されて本島で亡くなったり、本島にいる家族に引き取られて施設に入ったりすることがありました。なので、患者さんは救命手段としてのヘリに疑問を持ったというより、「自分が長く過ごしてきた島に、大好きなこの島にもう戻れないのでは」と感じて私に聞いていたんです。

——離島診療を行っていた別の医師も取材で同じことを言っていました。「（島民には）大きな病気になって内地の病院に行くと『島に帰ってこれないかもしれない』という考えがあったようだ」と。

私は患者さんの命を救いたくて、ヘリを呼んでいました。今もその手段は否定していません。離島であれば行った方が良くと思うケースはあります。しかし、その一方で、自分の行為が患者さんを生活の場や人生から引き離してしまう可能性もあるのではないかと、とも思いました。患者さんの「ヘリかね」の真意が分かってから、自分が救急医を志した理由をよく考えるようになりました。

浮かんできたのが、父の姿でした。おとんがやっていること。地域の生活に溶け込み、地域の患者さんの生活を豊かにしようと活動している姿に憧れて医師になったことを再確認したのです。「自分にとって救命救急は患者さんのための手段。その先にある患者さんの生活や人生に貢献することが目的なんだ」——。そう、言語化できました。

——「患者さんの生活を豊かにしたい」思いが診療所リニューアルの根っこにあると。

現在の医療受診は、「痛い」「苦しい」「つらい」といったネガティブな気持ちが高まらないと実現しないことが多いと思います。こういった動線を変えたいんですね。徳田医院を「おいしい」とか「楽しい」とか「居心地がいい」とか、そんなポジティブな気持ちで人が集まる場所にして、「それがたまたま診療所だった」というふうにした。結果的に病気の予防や早期発見につながればなおいい。

カフェや公園、ヤギ小屋の開設、イベントの開催などはこうした「入り口のデザイン」を変えていくための仕掛けです。将来的には、「出口のデザイン」に向けた取り組みも行いたいと考えています。



ヤギ小屋（左）もあるリニューアルのイメージ（提供動画から引用）

——サイトには、くわくわ企画が2020年から行ってきたことが時系列にまとまっています。パンを販売しながらの健康相談、各種オンラインイベントへの参加、カフェの開店準備の手伝い、彦根市のコンテストへの応募と受賞、彦根市議会議員とのミーティングなど……。フットワークが軽い印象を受けました。

フットワークは軽い方だと思います（笑い）。私は、「自分が楽しいことに突っ込んでいくのが一番」と考えているんです。例えば何らかの社会課題がある、それを解決する方法を考えてアイデアが浮かぶ、それを実践していく。こうした順番ばかりだと、やがてしんどくなっていくのでは。私の場合、自分が「おもしろい」と思うことをやり続け、それに共感してくれる人が増えていき、「気付けばちょっと社会が変わっていた」という形がいいなと。

私は過去、近江八幡市立総合医療センターと滋賀家庭医療学センターで指導医を務め、滋賀家庭医療学センターでは今も教育を担っていますが、学生には「起点とベクトルを大事にするといいよ」と伝えています。「始まりは自分のくわくわを大切に」と。地域のプレーヤーが集う琵琶湖畔のカフェ「きみと珈琲」の開店準備を手伝ったり、いろいろなオンラインイベントに参加したりしてきたのはそれらが好きだから。カフェが好きで、オンラインイベントなどを通して他業種の人、つまり医師である自分の世界観にいない人たちと話して気付きを得るのが好きだからです。

すると、不思議にも地域の人の向かいたい先が共通していたんですね。多くの人がコミュニティの力が弱まっていることを問題視していて、地域をどう良くしていけばいいんだろうとわが事として考えている。視点や角度はそれぞれ違うものの、「町を豊かにしたい」思いは同じだったのです。急性期病院で働いているときは知り合いに医療関係

者が多かったのですが、この2年で急速に他業種の知り合いや仲間が増え、割合が逆転しました。こんな活動の過程が診療所リニューアルのコンセプトや展望に反映されています。

◆徳田 嘉仁（とくだ・よしひと）氏

2013年大阪医科大学（現大阪医科薬科大学）卒。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修を、滋賀家庭医療学センターで後期研修を修了。近江八幡市立総合医療センター、医療法人双樹会守上クリニックなどを経て、2024年4月に徳田医院の副院長に就任予定。日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医・指導医、日本専門医機構総合診療専門医・指導医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

